

ナチュラルキス +<sub>plus</sub> 6

*side Keishi*

## C o n t e n t s

ナチュラルキス+<sub>plus</sub> 6  
～ side Keishi ～ 5

希望の涙 265

ナチュラルキス + 6  
~ side Keishi ~

## 1 ふくれつ面にディープなキス

こんなにも穏やかな気持ちになつたのは、いつたといつぱりだろう？

ハンドルに軽く手をかけて運転しながら、佐原啓史さはらけいしは小さく微笑んだ。

彼の隣には、長い間想いを寄せていた相手がちよこんと座つている。

彼女は啓史の教え子でもあり、婚約者である榎原沙帆子えのはらさほこ……実はまだ高校二年生なのだが、三日後には自分と結婚式を挙げることになつていて。

事の始まりは、先月のバレンタインデーだった。その日、いまでも信じられないが、結婚話が持ち上がり、いまに至つていて。

長いこと沙帆子への想いを断ち切れず、最悪な日々を過ごしていたものだから、この夢のような現実を喜んでいる余裕などなく、それどころか重い不安を抱き続けている。

沙帆子が啓史のことを前々から好きだつたというのなら、不安など覚えずにするのだが、残念ながら現実はそうではない。彼女には本命チヨコを渡したいほど、好きな男が他にいたのだ。彼女の同級生であり、生徒会の副会長である広澤脩平ひろざわしゅうへい。ムカつくが、容姿が整っているうえに性格も良い好青年だ。

広澤のほうも沙帆子を悪く思つていなかつたわけで、何事もなければ、ふたりはバレンタインデーの日に付き合うことになつたんだろう。

そんなふたりの間に、啓史が強引に割り込んだ。

広澤に対して罪の意識を感じないでもないが、沙帆子は絶対に譲れない。

バレンタインデーの日、こいつが具合を悪くしていなかつたら……いまこんな状況にはなつていいなんだよな。

ちらりと沙帆子を見て、ほっと息を吐く。

奇跡ともいえるような道を、ビクビクしながら歩んできた。だが、それも残りあと三日……こいつが嫌だと言えれば、その場で結婚話は消滅する。

やれやれ……さつきまで穏やかな気分でいたのに……

だが、油断していくは足元をすくわれかねない。結婚式が無事に終わるまで、気を引き締めていなければ……

突然、パチンという音がして啓史は驚いた。

なんだ？ 何か叩いたような音だつたが……

ここには啓史と沙帆子しかいない。つまり、音の発生源は沙帆子でしかありえない。

「何やつてる？」

「な、な、なんでも」

やたら焦あせつた声が返ってきた。

ちらつと沙帆子を確認すると、何やら顔の前で両手を振り回していた。

「虫でもいたのか？」

「い、いえ……そ、そんなもの、い、いませんけど……」

なら、なんだつたんだ？

さらに追及しようと口を開きかけたが、先に沙帆子が「あ、あの」と、話しかけてきた。

「わたしたち、どこのお店に……」

「俺んとこ」

沙帆子は「え？」と驚いた声を上げ、すぐに「あ、ああ」と納得したように返事をする。

どうやら、啓史のマンションの近くにある大型ショッピングセンターに行くことを、汲くみ取つてくれたらしい。

これから沙帆子の買い物に付き合うことになっている。彼女のパジャマを買いに行くのだ。

行きたい店があるのか一応聞いたが、どこでもいいと言うので、大型ショッピングセンターに連れていくことにした。あそこなら学校から離れているから、知り合いに目撃される可能性は低いはずだ。

それでも、このままでは行けないよな。スーツの俺はいいとしても、沙帆子は学生服を着ている。制服というのはひどく目立つ。制服姿の彼女と一緒に買い物をするのはかなりまずい。いま騒ぎ

になつたりしたら、式は取りやめになつてしまふだろう。

俺の部屋で、普段着に着替えていくとしよう。

そういえば、昨夜は散々だった。沙帆子の部屋に泊まることになつて……もちろんそれは嫌なわけではないが……成人男性の正常な欲求を持つ自分にとつては、限界まで我慢を強いられる夜になつた。

なのに沙帆子ときたら、眠れないでいる俺に、酒を持つてこようかなんて言い出すわ、赤ん坊にするように布団の上からポンポンと身体を叩いてくるわ……

ムカつくばかりでとても眠れなかつた。それでも寝たふりを続けていたら、あろうことか、沙帆子は啓史の布団に潜りこんできた。そして彼女は寝ぼけていたのかすぐに眠り込んだ。

そのあと啓史は、沙帆子の誘つているようなぬくもりと甘い香りに、とことん理性を試された。

あー、思い出したら、ムカムカしてきた。

昨夜味わわされた苦悩のいくらかでも、こいつにお返ししてやりたい。

マンション近くの信号で、啓史は右にハンドルを切つた。

「えつ？ 先生、そこ、行くんでしょ？」

沙帆子が戸惑つたように言う。このままショッピングセンターに行くものだと思っていたようだ。「ああ。一度帰つて着替えてからだ。そのほうが目立たなくていいだろ？」

沙帆子は返事をしなかつた。返事がないのは、自分の言葉に納得したからだろうと思っていたの

に、間をおいて、「先生、この制服じや目立ちますよね」なんてよくわからないことを口にする。しつくりこないやり取りに違和感を感じる。

こいつ……まさか忘れてんのか？

「制服で学校がわかるからな。面倒なことになると困る」  
沙帆子の様子を窺いながら、啓史は言葉を返した。

「でも、わたしが制服のままじゃ、先生が着替えても……」

やはりか……俺の部屋に、自分の荷物を運び込んだのに、その事実が頭から抜け落ちているようだ。

「お前も着替えるに決まってるだろ」

「はい？」で、でも、着替えが……」

「あるだろ、うちに、いくらでも」

そう告げると、沙帆子はようやく思い出したらしい。

「そ、そうでした」

「お前……」

啓史は途中で口を閉ざした。いまの状況をまるで認識できていないな、なんて、口にしないほうがよさそうだ。結婚に向けて動いているこの現実に、彼女の意識は危ういほど後れを取っている気がする。

俺はそれがわかつていながら、こいつが困惑しているうちに、さつさと結婚式までこぎつけたいなんて、狡いことを考えているんだよな。

いまは現実の認識などしくていい。結果的に俺と結婚したことを、後悔させなければいいのだ。いずれふたりの住まいとなるマンションに向かいながら、啓史は自分に言い聞かせた。

家に戻ると啓史はすぐ衣裳部屋に入り、自分の着替えを取り出した。

着替えを手にして振り返ると、沙帆子は借りてきた猫のように黙りこくつて啓史を見つめている。  
「俺は寝室で着替えてくる。お前はここで着替えろ」

「はい」

立ち竦んでいる沙帆子を衣装部屋の中に押し込んで、啓史はドアを閉めた。

数秒、その場で耳を澄ませていたが、沙帆子が着替えている気配はない。もう一度ドアノブに手をかけようとして、啓史はためらった。手をぐっと握り締めた彼は、寝室に足を向けた。

着替えを終えた啓史は、脱ぎ捨てたスーツを放りっぱなしにしたまま、ベッドに仰向けてなつて天井を見つめた。

沙帆子はいま俺のマンションにて、俺と買い物に行くために着替えをしてる……

「冗談みたいだよな」

けれど、これは現実だ。

結局、現実を認識できていないのは、俺も同じなのかもな。

ぼうっと天井を見つめていると、携帯が鳴り出した。

かけてきた相手を確認した啓史は、眉をひそめた。結婚式を挙げる予定の教会からだ。

いつたい俺なんの用だ？ 何か困った事態が起きた、なんてことじゃないといいが……  
身を起こした啓史は、携帯を耳に当て、いくぶん緊張しつつ口を開いた。

「はい。佐原ですが」

「佐原様、こんにちは」

教会の牧師の弟のようだ。牧師と牧師の弟は双子で、声もそっくりなのだが、話し方の雰囲気で弟のほうだとわかる。

「はい。あの、何かありましたか？」

「式の準備は着々と進んでおりますよ」

「ああ、そうですか」

そんな報告をするために電話してきたのだろうかと思つていると、聞きたいことがあると言ふ。

「何を？」

「ご招待なさる皆様に、何か記念品のようなものをご用意なさる予定はございますか？」

「記念品？」

「はい。そのようなご予定がおありでしたら、式の次第に盛り込んでおく必要がございますので。いかがでしようか？」

「そうか、記念品。考えてもみなかつたが……」

「それは……」

『必要なものですか？』と尋ねようとしたが、啓史は質問を変えた。

「そうですね。ですが、記念品となると……どんなものがいいのかな？」

披露宴は一年後に開くことになつていて、今回の式だって適当なものにしたくない。

「それはもう、おふたりの、皆様に対する感謝の気持ちがこもつていれば、どんなものでもよろしいのではないかと思いますが」

皆への感謝の気持ちか……

「わかりました。それじゃあ、何か用意します」

「ちょうどこれからパジャマを買いに行くんだし、ついでに記念品もふたりで選ぶとしよう。

「それで、そちらに持つてゆくのは当日の朝でも構いませんか？」

「ええ。ご新郎様にご用意させていただく部屋で、私に直接お渡しいただければ」

「わかりました。あの、この記念品のことは、両親にも内緒にしておいてもらえないか」

「ああ。はいはい。ご両親にもご用意なさるんですね。わかりました。お渡しするまでは極秘といふことで承りました。では、当日お待ちしております」

「はい。こちらこそ、よろしくお願ひします」

かなり忙しいのか、牧師の弟は啓史がそう言つた途端、すぐに電話を切つた。

もしかすると、沙帆子と啓史の結婚式で、一番忙しい思いをしているのは、この牧師の弟かもしない。  
啓史は、てんてこ舞いな牧師の弟の様子を思い浮かべて苦笑し、他に用意すべきものはなかつたか考えたが、特に何も思い浮かばなかつた。

「うん、大丈夫そう……だな」

納得するように呟いた啓史は、時間を確かめ、またベッドに寝転がった。そして組んだ手の上に頭を乗せた。

結婚式が終わつたら、ここに沙帆子を連れて帰つてきていいんだよな？  
それはもちろん、当然のことだが……

望みがあまりに容易に叶うようで、逆に不安になる。

おい、啓史、何を弱気なことを……。念願が叶うんだぞ。どこまでも強気で行け！

婚姻届は、沙帆子の母親である**芙美子**が用意してくれることになつていて。啓史は印鑑を用意しておき、当日サインするだけでいいはず。そして、その日のうちに役所に届けるつもりだ。

そのためにも、何を忘れても、印鑑だけは忘れるわけにはいかないな。

啓史は時計を見て、ベッドから起き上がつた。

沙帆子が部屋に入り、八分以上過ぎた。ちつとも出て来る様子がないが、さすがにもう着替えは

終えているだろう。買うものが増えたのだ、急がなければ……

立ち上がつた啓史は、沙帆子のいる部屋に向かつた。

「着替え、終わったか？」

「は……い、いいえ、も、もうちょっとです」

慌てた沙帆子の返事が聞こえてきて、啓史は顔をしかめた。

普通だつたら、着替えにこんなに時間がかかるはずがない。ということは、着替えもせずに、何

やら考え込んでいたということになる。それは、俺にとつてあまり喜ばしくない内容なんだろうな。  
「時間がなくなるぞ。急げよ」

心中穏やかではなかつたが、啓史は軽く催促してその場を離れた。

「あ、はい」

それからしばらくして、ようやく沙帆子は出できた。

「先生、待たせちゃつてごめんなさい」

「ああ。行こう」

沙帆子を急かして玄関に向かう。

先に靴を履いていた啓史は、彼女の学校規定の黒い靴を見て顔を上げた。

「靴は？ どれか別の履いてくだろ？」

靴箱を開けながら、啓史は沙帆子に尋ねた。

「は、はい。それじや、これ」

靴箱の中から、沙帆子は茶色の靴を取り出した。

彼女が履いたのを確認し、外に出ようとしたが、「先生」と呼ばれて、啓史は振り返つた。

「あの、わたし、この服でよかつたですか？」

啓史は眉を寄せて沙帆子を見つめた。

「どうして？」

「ど、どうしてつて……だって、これつて、全然おとなっぽくないなって……」

不服そうに言う沙帆子に、啓史は眉をひそめた。なぜ急にそんなことを言い出したのか、わけがわからない。だいたい、その服を選んだのは自分だろ……。

「おとなつぽくなきやいけないのか？」

沙帆子の言葉の真意がわからず、啓史は首を傾げつつ聞き返した。

「だつて、釣り合い取れてないかなつて……」

釣り合い？　俺と……ということか？

「馬鹿馬鹿しい。行くぞ」

沙帆子の発言にムカついた啓史は怒鳴るように言うと、さつさと外に出た。

「先生が嫌じやなかつたら、いいんです」

玄関の鍵をかけていると、啓史の後ろに立っている沙帆子がぼそぼそと口にした。振り返つて目を合わせる。

「俺？」

そうじやないだろ？　気にしてるのはお前じやないか……

「お前、俺と釣り合い取れてないのが、気になるんだろ？」

俺でなく、広澤となら釣り合いが取れるんだろう。そんな風に考えてしまい、胸がもやもやする。

「だ、だつて、わたしの服装つて、子どもっぽいから……」

「お前は好きな服を着ればいいんだ。ひとがどう思うかなんて些細なこと、気にするな」

釣り合いなどクソ食らえだ！

啓史は憤りながら歩みを速めた。

「些細なことじやないもん。先生の好みの服、着たいつて思うんだもん」

沙帆子の言葉に啓史は足を止めた。そして、ゆっくりと振り返る。

「俺の？」

俺の好みの服が着たいって？

頬を膨らませた沙帆子は、こくりと頷く。

ふくれつ面をする彼女の態度に思わず顔がにやけそうになり、啓史は額にぐつと力を入れた。そつけなく「ふーん」と口にする。

まだふくれている沙帆子の手首を掴み、啓史は強引に歩き出した。

「怒つてるんですよ」

啓史のふるまいが氣に食わないらしく、沙帆子の怒りはふくらむ一方のようだ。

真剣に怒つている沙帆子には悪いが、こんな彼女の様子は好ましい。

「ああ。見ればわかる」

「お子ちやま扱いしないでください」

お子ちやま扱い……？　そんなことした覚えはないが。こいつだつて、された覚えなどないはずなのに……。

「俺はいつだつて、沙帆子を女としてしか見ていない。

「別に……してないだろ」

「してるつ！」

怒鳴る沙帆子を放つておいて、啓史は運転席のドアを開けて車に乗り込んだ。

沙帆子のほうは、啓史を睨んだまま身動きしない。

啓史は、さっさと乗るよう促した。

沙帆子は腹立ちを見せつけるように肩を怒らせ、大股で助手席のほうへ回り、わざとらしい乱暴な仕種で車に乗り込んできた。

笑了た。

そしてそんな沙帆子が愛らしい。

啓史は、沙帆子の唇を塞いだ。彼女に驚く暇を与えないほど突然に――

お子ちゃんが扱いなどするつもりはないということを、啓史はディープ過ぎるキスで思い知らせた。

「子ども扱いしてるか？」

唇を離して顔を上げた啓史は、突然のことであわあわしている沙帆子を見つめ、にやりと笑いかけた。

## 2 楽しくお買い物

衣料品売場は平日だからか、客はまばらで、パジャマ売場には彼らの他に誰もいなかつた。

沙帆子が熱心に見て回っている間、自分もパジャマを眺めていた啓史は、バスローブを見つけ、ふいに足を止めた。

バスローブか……これは風呂上がりに着るものだよな。

パジャマなんかより、こっちの方が断然、脱がせやすそうだ。

顔がにやついていることに気づいた啓史は、自分を律するように顔をしかめた。

沙帆子に見られたのではないかと思って窺つてみたが、彼女はパジャマを夢中で選んでいた。ほっと息をついた瞬間、何かを感じたかのように沙帆子が振り向いてきてどきりとする。

「先生、どれがいいと思います？」

啓史は眉を上げた。

どれがいいかだつて？ そりやあもちろん、脱がせやすい真っ白なバスローブだ、と言いたいところだが……

「お前はどうがいいんだ？」

「わたし？」

沙帆子は目の前にある赤い花柄のパジャマを見つめて、悩み始める。それがいいのかと思つたら、すぐに別のものに視線を向ける。そつちはピンクの無地だつたが、リボンやフリルがたつぱりとついている。

うん、花柄よりこつちのほうが可愛いな。

「これか？」

ピンクのパジャマを指して聞く。

「ま、まあ。可愛いかなー、とは思いましたけど……」

まだ決めかねているのか、沙帆子は迷いつつ言う。悩む必要はなさそうだが……

「いいんじやないか」

「先生、他のも見てから」

ピンクのパジャマを手に取ろうとしたが、沙帆子に止められた。

「他の？」

啓史は眉を寄せて口にした。

別に、これでいいと思うのだが……

「先生……わたしのパジャマになんか、まるで興味ないみたいですね」

不満そうに沙帆子が言う。  
もちろん興味がないわけがない。いずれ沙帆子が身に着けた姿を見られると思うと楽しみで仕方がない。だが、時間が限られているから彼女の気が済むまで待ってはいられないのだ。これから記念品を選ばなければならぬ。

「時間がないだけだ。それに、そいつ、悪くないぞ」

「時間がないくつて、仕事が忙しいんですか？」

「いや。電話もらつたんだ」

「電話？」

「来てくれたみんなに、記念になるものを渡したらどうかと、提案を受けたんだ」「記念になるものですか？」

「ああ。それほど高価なものじゃなくて……」

そこまで口にして、まだ結婚の記念品だという説明をしていないことに気づく。

「ただ俺たちの結婚の記念に……」

照れくささが込み上げて、啓史はぼそぼそと口にした。

沙帆子の反応をさりげなく窺うと、ほんのり頬を染めている。思わず口元がゆるんでしまう。「何がいいか探さなきやならないからな。全員に同じ品を渡すのがいいと思うんだが、お前、どう思う？」

「で、でも……あ、あの……」

どうしたのか沙帆子が急に落ち着きを失くした。訝しんで見ていると、沙帆子は右手でポケットを押さえた。ポケットの中には、財布が入っているようだ。

「こいつ、金のこと気にしてるんだな？」

苛立ちが湧いた。金のことについては、すでにふたりで話し合い、解決できたと思っていたのに……

「沙帆子」

苛立つてゐるせいで、少しきつい口調になつてしまつた。沙帆子はうろたえた様子で、「は、はい？」と返事をした。

目が泳いでいる沙帆子に、ますます苛立ちは強くなる。こんなことで、うろたえたりして欲しくない。

「金のことは、心配することないぞ」

情けない顔で自分を見上げてくる沙帆子に、怒りが爆発しそうになつたが、啓史はぐつと拳を固めて気を静めた。苛立ちに任せて沙帆子を怒鳴りつけでは事態は悪くなるだけ、それよりもここは安心させてやるべきだ。

「前にも言つたろ。土曜日からは、俺の金でふたり暮らすんだぞ。俺に対して、金のことで遠慮なんかするな！」

落ち着いて話すつもりだったのに、つい語尾が鋭くなる。

沙帆子が怯えて身を竦ませているのを見て、啓史は自分に失望した。

自己嫌悪に陥る前に、この場の雰囲気をよくすることを考えなければ。

「でも……わ、わたし、貯金……」

「ちよ、貯金だあ!?」

カツとした啓史は、この場を穏やかに收めようとしていたことも忘れて、沙帆子の額をパチンとはたいていた。もちろん、手加減はしたが……

「あたっ」

「もうお前に任せてらんねえ。俺が選ぶ」

苛立ち紛れにそう宣言し、ピンクのパジャマを手に取った瞬間、啓史はバスローブのことを思い

出した。

そうだ。イライラさせられた仕返しに、こいつを驚かせてやろう。

パジャマを元の場所に戻し、バスローブが陳列されている棚に歩み寄り、ガシッと掴んで戻る。「これにする。行くぞ」

そつけなく告げると、沙帆子は目を丸くして「えつ？　ええつ？」と叫ぶ。

「せ、先生。それ……」

「わかってる」

沙帆子の反論を遮つてレジに向かおうとした啓史は、いつたん足を止めた。

こうなりや、いっそ自分のも買うか……

いい案のように思えた。

同じデザインの自分に合うサイズのものを手にし、啓史は再びレジに向かった。

沙帆子は困惑しているらしく、金を払う啓史を黙つて見ている。

支払いを終えて包みを受け取った啓史は、沙帆子の腕を掴んで歩き出した。

「先生、それ、パジャマじゃないですよ」

啓史に引っ張られて歩きながら、沙帆子は諭すように言う。

「そんなことわざわざ言われなくても、わかってる。

「ああ」

啓史は平然と言葉を返した。

「だから、バスローブですよ、それ」

さらには意を押すように言われ、今度は危うく噴き出しそうになる。

「そうだな」

「な、なんでバスローブなんですか？ パジャマ買いに来たんですよ」

「俺の好みの……だろ？」

啓史の言葉に対し、沙帆子はなんと答えていいのかわからないようで口ごもっている。

「……そ、そっただけど」

「なら、なんの文句もないだろ？」

沙帆子は納得できないようだつたが、反論できなくなつたらしく黙り込んだ。

そんな沙帆子を見つめつつ、彼女がバスローブを着た姿を想像してみようとしたが、残念ながらうまいこと描けない。

顔をしかめた啓史は、こんなことをやつている場合ではなかつたと思い出し、売場を見回した。とにかく早いところ記念品を選ばなければ……

「沙帆子」

肩を並べて歩いている沙帆子に呼びかけると、何か考え込んででもいたのか、焦つたように「は、あせはいっ」と答えた。

「記念品、何がいいと思う？」

改めて意見を聞くと、沙帆子は眉を寄せて考え込む。

啓史はいつたん足を止め、彼女と向き合つた。やみくもに売場の中をうろついていても意味はない。「先生は何がいいと思います？」

「さつぱり思い浮かばないな。招待客の年齢も様々だし、男女ともにいるわけだし……でも記念品なんだから同じ品のほうがいいんじゃないかと思う」

「ですよね」

そこでふたりで黙り込む。

しばしその場で考え込んだものの、何も思い浮かばない。沙帆子も同じようだ。

仕方がないので、専門店を一回りしてみることにする。

結婚式の記念品を売つていそうな店をあちこち見て回るもの、なかなかこれといったものが見つからず、あつという間に一時間ほど過ぎてしまった。

「参ったな」

「記念品にちようどいいものつて、なかなか見つからないですね」

「ああ。だが、なんか買わなきゃな」

じっくり探すだけの余裕があればいいが、式は三日後……なんとしても今日中に買わなくては。

「先生、あつちに雑貨のお店がありますよ。けつこう大きいみたい」

沙帆子の言う方向に目をやると、かなり大きな雑貨屋があつた。いろんなものがごたごたと店先に並べてある。

「行つてみるか」

「はい」

遠目には乱雑な感じに見えたが、実際に店に入ると、中はコーナーごとに綺麗に区分けされた。それでも足元には色んなカゴがあり、売り物が山のように積まれている。狭い通路に置かれていたから、それらを蹴飛ばさないで進むのは骨が折れた。今日は客が少ないからまだいいが、混雑していたら入るのをためらつただろう。

沙帆子はこの店が気に入ったのか、商品を手に取っては瞳を輝かせている。啓史はそんな彼女を楽しく見つめながら、あとをついていった。

「先生、フォトスタンドとかつてどうですか？」

啓史は沙帆子が指しているフォトスタンドに目を向けた。確かにデザインが洒落<sup>しゃれ</sup>っていて、贈り物にはいいのかもしれないが……どう見ても女性用だな……。親友の飯沢敦<sup>いいざわあつし</sup>あたりは、こんなもの貰つたところで喜ぶとはとても思えない。

「お前の両親にも、俺の家族にも、ひとりひとりに渡したいし……そうなるとこれは……どうだらうな？」

「ああ、それはそうですね」

「役に立つて、なおかつ喜んでくれるものがいいだろう。記念だからな」

「贈り物ですか？」

突然横から声をかけられた。この店の店員のようだ。

五十年代くらいの婦人で、派手な薔薇の柄のエプロンをついている。

「ええ、まあ。結婚の記念に、参加者に……」

「まあ、ご結婚の。えーっと……お客様の？」

店員は、啓史の隣にいる沙帆子に目を向けたあと、啓史に顔を戻して言う。ふたりを並べて見て、沙帆子が啓史の結婚相手だと信じられなかつたらしい。もちろん、むつとする。

啓史は沙帆子に近づいて並び、「ええ、俺達の」と言つた。店員が目を見開く。

この店員、失礼すぎるな。いや、正直な反応ともいえるし咎めるべきではないか。取り繕つて、心にもないことを言うような店員よりずつといい。

「ま、まあ。お嬢さん、とつてもお若く見えるから」

お若く見えるのではなく、実際若いのだ。

だが、俺たちはこんな会話をするためにこの店に入つたんじゃない。

啓史は沙帆子に尋ねた。

「他を当たるか？」

「結婚の記念品でしたら、色々ありますよ」

沙帆子を促したところで、店員が急<sup>せ</sup>くように言う。正直、もうこの店に期待はしていなかつたの

だが……

「どんなものが？」

一応聞いてみることにする。

「そうですね。ティーカップとか、時計、おしゃれなデザインのボールペンとシャーペンのセット

とか……あとはゴージャスなデザインのグラスなども、よくお買い上げいただきますよ」「おしゃれなデザインのボールペンとシャーペンってどんなのですか？」

「いろんなデザインがあるんですね」

沙帆子が聞くと、店員は食いついてきた。

いい印象は受けなかつたが、促されるまま啓史は沙帆子と一緒に店員のあとについて行つた。ボールペンとシャーペンのセットは、ありふれた感じの品だつた。取り立てていいとも思えなかつたし、インパクトに欠ける。

「男性用、女性用。それからお若い方用、お年を召した方用……どうです？」  
ぐいぐい商品を押してくる店員に嫌気がさし、すっぱり断ろうとしたが、沙帆子が「ま、まあ、素敵だけど……」と言う。

まずいな……

案の定、店員を調子に乗せてしまつたようだ。

「はーい。そうでしょう。お値段も色々で、ご予算に合わせて……」

店員に押され気味になつて汗をかいしている沙帆子を見て、啓史は笑いを堪えた。

「で、でも……こ、こういうのつて、あんまりもらつても使わないかも……」

おつ、沙帆子にしては上出来だ。しつかり自分の意見を言うとは。

面白いから、もう少し様子を見るか。

「そうですかあ。普通に売つてるものと違つて、おしゃれな品ですけどねえ」

「そ、それはまあ、おしゃれではありますけどお……」

沙帆子に救いを求めるように視線を向けられ、啓史は苦笑しつつ口を挟んだ。

「これはやめどこう。ほかに、まだお勧めがありますか？」

びしやりと『言うと、さすがに店員もシャーペンとボールペンのセットを推すのを諦めたようだつた。

「そ、それじゃあ、グラスはどうですか？ 色々な種類がありますから……」

グラスか……これもまた、ありきたりだな。

あまり期待せずに、先ほどと同じように店員についてゆく。

連れてゆかれたコーナーには、たくさんのグラスが並んでいた。照明に反射してキラキラと輝いている。

「わあ、綺麗」

沙帆子は感激の声を上げ、グラスに顔を近づけて眺め始めた。沙帆子の食いつきっぷりに、店員はまた商魂を燃え上がらせたようだつた。

「ワイングラス、シャンパングラスなどが人気なんですよ。これなどは今日入荷したばかりで……確かに悪くないなと思えた。年齢性別を問わない商品だ。もつともそれなりにいい値段はついているようだが。

「数はありますか？ 同じものを十三個ほど欲しいんですが」「ええ、大丈夫だと思います」

そう言つた店員は、ごてごてしたデザインのグラスを手に取つて、くどくどと説明を始めた。

「すみません。自分たちで選びたいんで」

ぴしやりと言つてやつたら、店員はようやく静かになつた。

啓史は改めて沙帆子に向き、口を開いた。

「沙帆子、どれがいいと思う？」

「グラスにするんですか？」

黙り込んだ店員の様子を、かなり気にしながら、沙帆子は聞いてくる。啓史は内心苦笑しつつ頷いた。

「ああ。誰にでも喜んでもらえそうだし、俺はいいと思うんだが……お前は？」

「わたしもいいと思います。詩織や千里も、きっと喜びます」

江藤詩織と飯沢千里は沙帆子の友人で、結婚式にも招待している。

「で、どれにする？」

「そ、それなら……えーっと」

沙帆子はグラスをひとつひとつ確認し始めた。啓史も探してみる。

店員はふたりから少し距離を取り、嬉しそうにこちらを見ている。この様子なら購入してもらえ

そうだと期待しているのだろう。もちろんいいのがなかつたら、その期待には応えられないが。

俺の好みからいえば、シンプルなやつがいいんだが……それだと味もそつけもないか……やつぱり多少のインパクトは欲しいよな。だが、こんな天使や花がごてごてとついているやつは願い下げだ。もつとさりげなくインパクトのあるもの……

「あの、これとか、どうですか？」

沙帆子が遠慮がちに聞いてきた。かなりシンプルなワイングラスだ。

「シンプルすぎて、ちょっとインパクトに欠けないか？」

そう指摘すると、沙帆子が謎めいた笑みを浮かべる。

うん？

「グラスの底を覗いてみて下さい」

沙帆子からグラスを手渡され、言われるまま底に目を向けた啓史は、驚いて眉を上げた。

「ハートが……」

「どうですか？ インパクト、あると思うんですけど」

啓史は同意して頷いた。

グラスの底には、よく見ないとわからない程度にハートの形が浮かび上がつていて、とても洒落ている。

「いいな。これに決めようか？」

ふたりのやりとりを聞いていた店員は、すかさず歩み寄ってきた。

「それはもう、最高級品ですよ。結婚式の記念には最適かと」

興奮気味に説明する。

「さ、最高級……？」

急におどおどし始めた沙帆子は、いまさらグラスの値札に目を向ける。最高級品と聞いて、値段

が心配になつたらしい。

値段を確認してみると、二千八百円だつた。

いいじやないか。高すぎもしないし、安くもない。

「それじや、これ、十三個、包んでもらえますか？」

「い、いいんですか？」

心配そうに言う沙帆子の頭にそつと手で触れ、彼女を黙らせる。

「はいはい。それでは包装紙とリボンをお選びいただけますので、こちらへ」

弾んだ足取りで店員はレジに歩いてゆく。

啓史は、まだ金額を気にしているらしい沙帆子を連れてレジに向かつた。

包装には一時間以上かかるというので、明日受け取りにくることにして店をあとにした。

「素敵なグラスでしたね」

「ああ。まあ、あれなら、喜ばれるんじゃないかな」

「あの先生？ 十三個つて……十一個じや……」

「二個は俺達のだ。自分たちに記念品があつたつて、悪くないと思ってな」

啓史は照れくささを隠すために、わざとそつけなく言つた。

「せ、先生」

感激した様子で沙帆子が呼びかけてくる。それがくすぐつたすぎて、啓史は彼女の手を乱暴に掴

んで、歩くスピードを速めた。

### 3 言葉の代わりに

マンションの駐車場に車を停め、啓史は時間を確かめた。榎原家には、遅くとも沙帆子の父親である幸弘さん<sup>ゆきひろ</sup>が帰宅するまでには到着しておきたいが……。

沙帆子から挑まれた、テレビゲームの十回戦の勝負もまだ二回しかやっていないから、早く三回戦目をやりたい。残り八回をいまからやつて終わらせるつてのは、さすがに無理だろうか？

玄関に入り、靴を脱いで家に上がつた啓史は、あとから上がってきた沙帆子が衣裳部屋のドアに手をかけたのを見て、思わず襟首を掴んだ。

「せ、先生」

襟首を掴まれて驚いた沙帆子は、トントンと跳ねるように二歩後ずさつた。

「な、なんなんですかあ？」

沙帆子は驚いたような表情で、啓史を見上げて文句を言う。

「決まつてる。三回戦だ」

「は、はい？」

沙帆子は片頬をピクピクと引きつらせた。

まさかここで、勝負の話が出るとは思っていなかつたらしい。

「きよ、今日は時間ないし、また今度ということで……」

啓史は鼻を鳴らした。

「何言つてる。十回戦なんて、ほんとなら一日で勝負がつくぞ。『いたごた言わずに、来い』啓史は嫌がる沙帆子の背中を押し、ゲームをするために居間へ連れていこうとしたが、彼女は足を踏ん張つて抵抗する。

「や、や、や、やだ、やです。きよ、今日は体調が万全じゃないっていうか……」

啓史は眉を上げて沙帆子を見つめた。

「体調が？」

「そ、そ、うなんですね。だからですね。ママも夕食作つて待つてるし……また今度ということで……」

そんな物言いで、勝負から逃げられると思っているなら片腹痛い。

なんとか逃れようと、身体を捻つて抗つてくる沙帆子を、啓史は押さえつけた。

「そんな言い訳、はいそうですかつて、俺が聞くと思つてるのか？　お前もまだまだ甘いな。今日中に八回やろうつてわけじゃない。ほら、歩けよ」

襟首を掴んだまま、啓史は無理やり居間に向かつた。

唇を突き出している沙帆子をテレビの前に座らせて、さつさとゲームの準備をする。

彼女の手にコントローラーを握らせた啓史は、すぐにゲームをスタートさせた。試合放棄したけりやすすればいいと思つたが、いつたん始まるど、沙帆子は態度を変えて戦闘態勢に入った。

面白味など微塵もなく、あつという間に勝負がついた。沙帆子にやる気がなかつたわけではなく、あまりにも必死になり、力み過ぎたせいだ。

あんなにコントローラーを振り回してたんじやな。もう少し冷静になれば、それなりの勝負に……まあ、こいつの技量じゃ、どう足搔いても無理か？

沙帆子はあまりにあっけなく負けてしまつたからか、呆然として画面を見つめている。

同情はするが、どうにも噴き出してしまいそうだ。

笑いを堪えていた啓史は、思わず沙帆子の額を指先でパチンと弾いた。

沙帆子は恨めしそうな目を向けてくる。

「そんな顔するな。まだ七回残つてる」

できる限り、慰めを込めてやさしく声をかけたつもりだったのに、沙帆子はまるで侮辱されたかのように睨んできた。

思わずいたぶつてやろうかと思ったが、よく見れば彼女は涙目だ。

怯んでいると、沙帆子は手にしていたコントローラーをぽんと床に投げた。

「もうやんないつ！　ぜつたいやんない！」

肩を怒らせて叫ぶ。

ずいぶんと面白かったが、勝負を放棄するのは頂けない。啓史は涙を含めた目を沙帆子に向か、脅すように彼女のほうに身を乗り出した。

「ほお、自分から言い出した勝負だぞ。まさかお前、勝手に放棄するってのか？」

よほど怖かつたのか、沙帆子は座つたまま後ずさろうとする。

「だ、だつてえ！」

啓史は沙帆子にじり寄つていった。おど脅しが過ぎたのか、沙帆子はバランスを崩し、叫びながら床に背中から倒れ込む。そのはすみで啓史も彼女に覆いかぶさるように倒れた。

「いたた……」

この体勢は……まずいな……

床に転がつている沙帆子を見下ろしながら思う。そして、そんな風に考へてゐる自分の他に、期待に鼓動を速めているもう一人の自分もいる。

「せ、先生……」

「時間がないぞ。早く着替えなきやな」

彼の理性が発した言葉を、もうひとりの啓史は聞いていなかつた。

「そ、そうですよね」

啓史を見つめ、沙帆子はうろたえたように口にしたが、その瞳は何か感じてゐるのか、ひどく揺らいでいる。

「き、着替えます」

「手伝つてやるよ」

啓史の下から這い出そうとしたばたしている沙帆子に言ふ。

「……て、手伝い？」

啓史は沙帆子の胸元に手を伸ばした。それに気づいた沙帆子は、ぎょっとしたように目を剥いた。  
「じ、自分で……」

沙帆子は啓史の両腕を掴んで抵抗する。彼の行動を制止しようとするが、力の差は歴然で、まったく妨害にはならなかつた。

上着のボタンを外して服をはだけさせた途端、沙帆子が息を呑み、両手で胸を押さえた。

啓史は彼女の首元にある指輪を見つめた。これを目にするとたびに喜びを感じる。

指輪にそつと触れた啓史は、彼女の首筋に顔を寄せた。そして、ぬくもりのある肌に直接唇で触れた。

彼女の肌から発する甘い香りに誘われる。いくら味わつても、もつとと思わせる。

啓史はゆっくりと首筋から下に向かつて唇を這わせていった。

「せんせ……」

彼の行為を止めるための言葉だったのだろうが、そこには彼の与える刺激に屈服する響きが含まれていた。

「啓史だ」

かすれた声で、彼女の耳元で命じるように囁く。

そのあと、聞き取れないほど微かな声で「啓史……」と口にされた沙帆子の言葉は、たまらないほど啓史の胸を甘く疼かせた。

抑えきれそうになかったが、啓史はどうにか行為を途中でやめた。

沙帆子の身体をぎゅっと抱きしめ、自分を落ち着かせる。

一度火のついた欲望を抑え込むのは容易じやない。すでに何度か体験してわかっていることなのに、愚かなことにギリギリのところまで行為を深めてしまう。苦しむのは自分なのに……

かといって、沙帆子を味わわないではいられない。

ぴつたりと合わさっているふたりの胸……できることなら離したくない。だが、そんなわけにはいかない。すでに時刻はかなり遅くなってしまっている。沙帆子を早く家に送り届けないと……

啓史は息を整えながら、互いの心臓の鼓動に意識を向けた。そして、彼女の右手に自分の指を絡め、ぎゅっと握り締めた。

沙帆子は、啓史のこうした行為を拒否しない。

だが、もしも……最後まで求められたら、こいつはどうするのだろう？

拒むだろうか？ それとも……

啓史は頭を振り、馬鹿な考えを振り払った。

いまはこうして彼女を抱きしめていられるだけで、満足すべきだぞ。

彼は顔を上げて沙帆子を見つめた。顔を横に向けて目を瞑つむっていた沙帆子は、啓史の身体が離れたからか、薄く目を開けて彼を見上げてきた。

桃色に頬を染め、潤んだ瞳でそんな風に見つめられると、ひどくそそられる。

「着替えなきやな……」

再燃しそうになる欲望を抑え込み、啓史はそう口にした。沙帆子に対してもうより、自分に向けて口にした言葉だった。

彼女はひどく恥ずかしげに、今までできる精一杯の身繕いをしながら無言で頷き、身を起こそうとする。

「沙帆子……」

啓史は思わず名を呼んでいた。

もどかしいほどに答えの欲しい質問が胸の中にある。

……俺が好きか？

彼の言葉を待つ沙帆子と目を合わせる。だが、結局、その問いは口にできなかつた。

沙帆子を俺の実家に連れていった日に、徹兄てつにいがこいつに向けて言ったとおりだ。好きだの愛しているだの、自分には照れくさすぎて口にできない。

心に湧き上がつてくる感情を、そのまま素直に言葉にするつてのは、どうにも苦手なのだ。

啓史は言葉を口にする代わりに、沙帆子の唇にそっと自分の唇を重ねた。

玄関のドアを開けると、芙美子がにこやかに出迎えてくれた。

「ただいま」

沙帆子に続いて家の中に入つた啓史は、芙美子に向けて頭を下げた。

「遅くなつてすみません」

マンションを出る前に、帰りが遅くなることは電話で告げておいたが、遅くなつた理由が理由なだけになんとなく気まずい。

啓史の望みどおり、沙帆子と結婚することになれば、もうすぐふたりは一緒に住むことになる。となれば、芙美子や幸弘が娘と暮らせるのは、今日を入れても三日しかない。

そのことに、啓史はいまになつて思い至つた。

俺ときたら、娘と過ごす残り少ない時間を、芙美子さんから取り上げてしまつたんだよな。

「啓史君？ どうしたの？」

「先生？」

芙美子と沙帆子から呼びかけられ、啓史は顔を上げた。

玄関先で靴も脱がずに考え込んでしまつていたようだ。啓史はふたりに軽く頭を下げ、靴を脱いで上がり込んだ。

「あの、幸弘さんは？」

沙帆子が着替えのために私室に入つて行くのを見ながら、啓史は芙美子に尋ねた。

「もうそろそろ帰つてくると思うわ」

「そうですか」

よかつた。幸弘さんの帰りには間に合つたようだ。

「どうしたの？」

「いえ……」

啓史は心にあるものを言葉にできず、曖昧に答えた。

このひと月ほどの間、啓史は結婚が現実になることだけを願つて過ごしてきた。

つまり、自分のことばかり考えてきたということだ。

沙帆子の気持ちは当然気になっていたが、幸弘や芙美子の気持ちは……何も考えていなかつたと言つてもいいくらいだ。

結婚が現実になるかどうかはわからない。それでも、現時点では現実となる可能性のほうが高いと思う。

啓史が沙帆子を手に入れるということは、つまり、榎原夫妻にとつては一人娘を手放すということだ。

だとすれば、娘との時間は、残り三日だけ……

俺はふたりのために、何かできることがあるのでないのか？

それに、俺の家族に対しても、このまま何もせずに結婚式を挙げてしまつていいのか？

いまさらそんなことを考えている自分に嫌気がさす。

まったく、俺は考えなしだな。配慮がない。

周りの人間の気持ちを、まったく汲もうとなかった。

だが、こんな風に考えられるのも、沙帆子との結びつきが強くなつたからこそなのだ。ようやく、余裕がもてるようになつた。……つまり、そういうことなんだよな。

「啓史、ふたりが片付けていた間に、ひと勝負しようぜ」

夕食が終わり、いつものように沙帆子と芙美子が片づけを始めたところで、幸弘が誘つてきた。

「はい」

啓史が頷くと、幸弘は自らゲームの準備を始めた。

啓史は準備をしている幸弘をじっと見つめた。

幸弘さんは、いまどんな思いでいるんだろう？

いまもまだ、結婚が取りやめになる確率は高いと思つてているんだろうか？

「えっ！ ま、またやるの？」

キツチンのほうから沙帆子の声が聞こえてきて、啓史は顔を上げて彼女に視線をやつた。

「憩いの時間は、ゲームに決まってるでしょ？」

明るく弾んだ声で応じる母親に、沙帆子はむつとした顔を向けている。

そんな沙帆子を見て、両親が望んでいたのだからゲームぐらいやつてやれと言いたくなる。

沙帆子は、これまでとまったく変わりない。結婚式が迫つてているということもわかつているのだろうし、両親のいるこのアパートを出て、俺と暮らすのだということも頭にあるんだろうが……内

心では理解できていなかつたら、いつもと同じ調子なのだろう。

お前はしつかりと現実を見つめるべきだぞ、と言つてやらなければならないのかもしれないが……こいつが現実を見つめたら、俺にとつてはまずいことになるかも知れない。

それでも、いずれ沙帆子は現実を直視する。それがいつになるかわからないが、結婚式までには、間違いなくそのときは訪れるだろう。現実を直視した沙帆子が、どうなるのか？

……考えたくもないな。

結局、俺はずつと、崖っぷちに立つたままつてことなのだ。

いまの俺がすべきことは……もつともつと沙帆子との時間を重ねて、ふたりの繋がりをより強固なものにすること……

「せ、先生、お仕事忙しいんじや、なかつたですか？」

考え込んでいた啓史は、沙帆子から話しかけられて顔を向けた。

いいなりを賭けた勝負に勝てそうもない彼女は、なんとか勝負を避ける方向に持つていきたいようだ。

それほどに、俺のいいなりにはなりたくないらしい。

そんな啓史の思いを感じたのか、沙帆子はひどく気まずそうに顔を伏せた。

「まだ一時間くらい大丈夫だ」

「あらあ、けつこうたつぱり遊べるじやない。それじゃ、テニスとかもやりましょうよ」

母親の提案に、沙帆子は噴き出したくなるほど、一気に華やいだ顔になつた。

まあ、この反応は当然か。テニスのゲームは、いいなりを賭けた勝負と関係ないものな。

「そうよ。ボクシングばつかじやなくて、今夜はみんなでテニスをしようよ」

「ボクシングもやるわよお。ママね、かなり腕を上げたのよお！」

沙帆子の顔が強張つたのを見て、啓史は笑いを堪えた。美美子さん、ナイスだ。

「ママ……ま、まさか、昼間、ずっと練習してたりしないよね？」

「あ、あら、やだ。ずっとなんてしてないわよお」

美美子は沙帆子から視線を逸らして言う。どうやら沙帆子が疑つたとおり、美美子はかなり練習を積んだらしい。やれやれ、この様子では、沙帆子の勝ちは危ういかかもしれないな。

「ほら啓史、やるぞ」

コントローラーを渡され、テレビを見ると、テニスではなくボクシングの画面が映し出されていた。どうやら沙帆子の期待も虚しく、まずはボクシングのゲームをするらしい。

色々考えてしまったからか、啓史はどうにも真剣になれず、幸弘に負けた。

ひと勝負終わったところで、次は榎原夫婦の対決になつたが、ここでも幸弘が勝ちを取つた。そして、啓史と沙帆子の四回目の勝負。もちろん、いくら氣が入らないといつても、相手が沙帆子なら啓史の勝ちは必然。あっけなく啓史の勝ちでカタがついた。沙帆子は、悟りの境地にでも入つたのか、まったく反応を示さなかつた。

啓史は自分に向けられた美美子の視線に気づき、顔を向けた。  
「なんですか？」

「負けてやらないのが不思議つてことよ」

確かに、いいなりの勝負が絡んでいなければ、手を抜いてやらないでもないのだが……

「勝負を挑まれたんですよ」

「挑まれた？ 沙帆子から？」

ふたりのやりとりを聞いていた沙帆子は、むつとしたのか小さく唇を突き出した。

次はテニスゲームをすることになった。啓史と沙帆子がペアになり、幸弘と美美子がペアになつて、準備が整つたところで沙帆子の携帯が鳴る。

沙帆子は慌てて電話に出た。

「…………うん。…………千里、ごめんね。…………なあに？ あ…………ちょ、ちょっと待つてて」

電話をかけてきたのは、彼女の親友の飯沢だったようだ。

話しこんでいた沙帆子は、三人が自分を待つてゐるのに気づいたらしい。  
「時間かかるの？」

美美子に問いかけられた沙帆子は、母親に視線を向けたまま、携帯の通話口に向かつて「それが、いま、テレビゲームしてて」と説明する。

『それって、まさか、啓史さんと？』

それまで飯沢の声はぼそとした声で聞き取れなかつたのだが、いまの言葉は啓史にもはつきりと届いた。

……ケイチャント？

視線を揺らしていた沙帆子が、「ま、まあ、そう」と、居心地悪そうに啓史の視線を避けようとしているのを見て、ピンときた。

ケイチャンてのは……この俺のこと……か？

尻の辺りがむずむずし、どうにも落ち着かない。

「あ、うん。何時くらい？……わかつた。……うん」

通話を終えて携帯を閉じた沙帆子は、そそくさと膝のところに携帯を置き、コントローラーを手に持つ。その間、啓史の視線を避けっぱなし。飯沢の啓ちゃん呼びが聞こえたんじゃないかと気しているらしい。しかし、飯沢が俺のことを啓ちゃんと呼んでいるとは……

まさか沙帆子のやつ、飯沢や江藤と一緒になって、俺のことを啓ちゃんと呼んでるのか？

そう考えて、なんとなく理解できた。これは、飯沢の考えなのではないだろうか？

自分と沙帆子は教師と教え子の関係。だから、第三者に話を聞かれてはまずい場所では、俺だと

わからぬ呼び名を使うのが得策だと考えて……

たぶん、そななんだろうな。啓ちゃんという呼び名は、どう考へても俺とそぐわない。口にしているのを聞いたところで、誰も俺だとはわからないだろう。

嬉しくはないが、感心した。

「さ、それじゃやるわよお。幸弘さん、絶対勝つわよ！」

沙帆子の準備が整ったのを見て、芙美子が鬨ノミの声を上げた。

「おお、任せとけ」

ずいぶん気合の入ったやりとりだった。

どうもこの時点ですでに、この夫妻のペアに啓史と沙帆子は負けているような気がする。

啓史とペアの沙帆子は、まったく自信なさげに啓史を見つめる。

「いいか沙帆子、お前、百二十パーセントの力でゆけ」

沙帆子に気合を入れようとして、啓史は強く言つたのだが、刺激が強すぎたのか沙帆子は返事をしない。

「沙帆子？」

「は、はいっ！」

啓史の声にびびつたらしく、沙帆子は首を竦すくめて大きな返事をした。

「どうやら、僕らの勝利は確実なようだよ、芙美子ちゃん」

正直、幸弘の言葉は正しいと思えた。

「やつてみなければ、結果はわかりませんよ」

「そりや、そうだな」

けれど、負けなどありえないと言わんばかりに、自信たっぷりに幸弘は言い放つた。

そして勝負は予測した通り、沙帆子と啓史のペアはまるで幸弘たちの相手にならなかつた。

勝ちにきた幸弘と芙美子のペアは、沙帆子の苦手とするコースにバンバンとスマッシュを決めてきて、啓史にはどうにもできなかつた。

ゲームに夢中になつてゐる間に、時間は瞬く間に過ぎてしまい、啓史は帰ることにした。

榎原夫妻に挨拶をして玄関に向かう啓史に、沙帆子は当たり前のようについてくる。

自分のせいでゲームの勝負に負けたことを氣にしているのか、ずいぶんとしょぼくれている。そんな沙帆子の様子は、とても可愛らしかった。

「先生……ごめんなさい」

靴を履いていると、沙帆子が頭を下げて謝ってきた。

「ばーか」

啓史は沙帆子の頭のてっぺんにぽんと手のひらを乗せた。

「……百二十パー セント出せなくて……」

もごもご言う沙帆子に、啓史は「バカヤロ」と軽く叱つた。

「あんなの、本気で言つたわけじゃないぞ」

沙帆子の額を、啓史は愛しさを込めてひとさし指でやさしく押した。

「そ、そうなんですか？」

「当たり前だろ。楽しかつたぞ、俺は。……お前は楽しくなかつたのか？」

「楽しかつたです」

はにかむ沙帆子に、啓史は笑みを浮かべた。

「ん」

とても心地よい雰囲気で、帰るのが惜しい。靴も履いてしまつたが、沙帆子から離れたくない。彼女を見つめていると、触れたくて仕方なくなる。

「

啓史は手を伸ばして彼女の前髪を掴み、くいくいつと愛情を込めて引っ張つた。

「それじや、また明日な」

啓史はしぶしぶ口にした。

「はい。そ、そだ。明日の朝、千里が話があるつて……だからいつもよりちょっと早く行きます。でも、先生のところにちゃんとお弁当届けに行きますから」

「森沢のことか？」

「な、なんか違うみたいでした。……たぶん、詩織のことじゃないかなって思います」「わかった。それじや……」

啓史は軽く唇を触れ合わせ、沙帆子の頬をやさしく摘んだ。  
「おやすみ」

沙帆子の「おやすみなさい」の言葉を耳にしながら、啓史は外に出た。

土曜日まであと三日……

三日経つたら、俺はあいつとずっと一緒にいられるのだろうか？

それとも……最悪の現実に身を置き、呆然としている俺がいるのだろうか？

三日後の自分がどうしているのか、いますぐ確認したい衝動に駆られる。

閉じたドアの前でため息をつき、啓史は車に向かつた。

車の運転中、携帯が鳴り出した。

もちろん、運転中だから出られない。

携帯はかなり長いこと着信音を鳴らしていたが、そのうち静かになつた。

赤信号で停まつたところで、啓史は素早く携帯を取り出して相手を確認した。

なんだ、敦か……

啓史は顔をしかめた。

こいつからの電話はろくなことじやないだろう。

いまは特に、とことん用心したほうがいい気がする。また何か、俺を貶めるような、とんでもないことをこいつは考えている可能性がある。

やつかいなやつだよな。……なんでこんなのとつるんでんだ、俺は……

青信号になり、啓史は疲れを帶びたため息を吐き、車を発進させた。

家に帰り着くまでに、三回も電話がかかってきた。

こんなにしつこくかけてくるとは、敦の野郎、やっぱりなんか企んでいるんじやないか？

実は、先週の金曜日の夜、敦から電話がかかってきたのだが、しようとばかりものすごい憤りぶりだった。

あの日、敦の従兄妹である飯沢千里に、沙帆子と結婚する事実を告げた。そして敦は、彼女から沙帆子が高校生であるという事実を知ったのだ。

啓史にとっては、敦の怒りは予想していたことだったから、平然と受け止めた。だが、敦にとつては、それは面白くなかったようだ。俺が仰天するくらいの派手な仕返しをしてやろうと目論んでいてもおかしくない。

よほど電話を無視して、先に風呂に入ろうかと思つたが、仕方なくソファに座り携帯を取り出し、敦に電話をかけた。

「俺だけど……」

不信感を滲ませ、啓史は第一声を発した。

「よお！」

啓史の気分とは正反対の楽しげな声が聞こえてきた。

「何功用か？」

「明日、泊まりに来いよ」

「何言ってんだ、明日は平日だぞ」

「あのない、平日がどうとかって、普通の会話してんじやねえよ」「どういう意味だ？」

「お前、結婚すんだぞ。今度の土曜日、あとたつた三日しかない」

「……ああ、で？」

「言わなきやわかんねえのかよ。佐原お前、彼女にのぼせ上がりすぎて、頭のキレが悪くなつてんじゃねえのか？」

敦のからかいに乗る気はなかつた。

「用件を話せ」

啓史はそつけなく言つた。

敦は「にひひ」と意味不明な氣味の悪い笑い声を漏らし、ようやく話し始めた。

「つまりだな。お前が独身返上となる前に、最後にもう一度飲もうつて言つてんだよ」

「そんな暇はない」と啓史が断ろうと口を開けたところで、「だつてよ」と敦が続けた。

「結婚したら、お前。高校生の沙帆子ちゃんがいたんじや、そう簡単に酒も飲みに行けなくなるんじやねえのか？」

確かに、沙帆子を一人で置いて、飲みになんていかないだろう。

もちろん、敦をここに呼んで酒を飲むなんてまっぴらごめんだ。酔つた敦は、調子に乗つて何を言い出すか、わかつたもんじやない。

とすると……確かに、次にこいつと飲むのは、ずいぶん先のことになるだろうな。

「佐原、来るよな？」

その言葉には、敦らしくない頼み込むような響きがあり、啓史は心を決めた。

「わかつた。ビール持つて行く。いつものでいいか？」

「そんなもんいらねえから、泊まりの荷物だけ持つてこい。お前の結婚の前祝いなんだ。俺が全部準備しどくさ」

敦の『前祝い』という言葉に、啓史は敦がくれたどんでもない代物の事を思い出してしまい、胸に苦いものが込み上げてきた。

もう二度とあんなものを知らぬ間にカバンの中に入れられないようにしなくては……  
あんなこと一度とするなよ、と思い切り釘を刺してやりたいのはやまやまだつたが、そんなことをすれば、かえつて敦を煽るようなものだろう。

ほんとに、こいつ……やつかいなやつだよな。

「わかった」

啓史はため息を呑み込みながら答えた。

「おう、ほんじや、明日な！」

すこぶる機嫌のいい声で敦は言い、電話を切つた。

啓史は携帯をテーブルに置き、頭の後ろに手を当てて、ソファにもたれた。

明日は敦のところか……

結婚式の日まで、できる限り沙帆子といいる時間を持ちたかったんだが。

そう考えた啓史は、今夜の沙帆子の両親の様子を思い返した。

テレビゲーム中の榎原夫妻は、いつもよりずいぶんとテンションが高かつた。

ふたりは無理をして明るく楽しげに振る舞つてゐる……そう感じた。

娘と一緒にいられる時間が残り少ないという事実が、堪らないのだろうな。

幸弘と美美子がいまどんな思いでいるのかを考えると胸がひりつく。だからって、もちろん結婚を取りやめる気はない。

あと三日なんだよな。

そう考えて顔が歪んだ。俺ときたら、式までの日数を数えてばかりいる。

だが、式が決行されるのかされないのか、当日までわからない状況なのだ。落ち着いてなどいられないものか。

それでも……このまま当日を迎えてしまつては、俺は何もしなかつたことを後悔するんじやないか？

最終的にどつちに転ぼうと、いまの俺にできること、俺がしなければならないことが、何かしらあるのでは……

沙帆子が両親と同じ屋根の下で過ごせるのは、もう三日だけ……明後日は結婚式の前夜になるのだから……本当の意味で、ゆっくり過ごせるのは、今日と明日だけってことになるんじやないのか。

美美子たちは、どう考えているんだろうか？

残りの日々を、親子水入らずで過ごしたいとは思つていいのか？

お互いを知るために、結婚式まで毎日夕食を食べに来るようになると美美子に言われ、その言葉に従つてきただが……

明日、敦のところに行くことになつて良かつたのかもしれない。

榎原家に行くのは当たり前という気持ちでいたが……やはり、式が近づいたいま、親子水入らずで過ごしてもらうべきだ。

沙帆子といふ時間が減るのは正直不安だが、学校でも会えるし、帰りも家まで送つていける。そうだ、明日の夕食にレストランでの食事をプレゼントさせてもらうってのはどうだろう？

余計なことだろうか？

いや、実際聞いてみないことにはわからない。

何もないよりはよっぽどましだ。

レストランのことなら、伯父の妻である麗子に相談するのが一番だらう。

すぐ実行に移そうかと思つたが、今日はもう時間が遅い。明日になつてから相談することにし、

啓史は風呂に入るために立ち上がつた。

今朝は格別寒いな。

冷え切つた部屋の空氣に負けそうになつたが、啓史は覚悟を決めて、ベッドから抜け出した。洗面を終えた啓史は、スーツの下に薄手のセーターを着込み、黒いコートを羽織つてマンション

を出た。

学校に着き、ほとんど人気のない校舎の中を足早に歩く。  
自分の部屋に辿り着いた啓史は、何より先にエアコンを入れた。

沙帆子が来るまで、あと二十分ほどだろうか……  
それまでに、部屋が温まるといいんだが……

啓史は机の前に座り、仕事を始めた。

早朝のシーンと静まり返った中に足音が響き、啓史は眉をひそめて顔を上げた。

パタンパタンという音で、この足音の主はスリッパを履いているのだとわかる。  
つまり生徒ではなく教師……

なんとなく嫌な予感がし、啓史はそつと立ち上がりドアに鍵をかけた。

まさかまた、あの化粧の濃い女性教師がやつてきたんじゃないだろうな。

バケ子女史だけは我慢できない。性格は最悪で化粧の匂いはきつい。何より高校教諭にあるまじき派手で露出の高いデザインの服は、どうにも下品に見える。

そのままドアの前で息を潜めて耳をそばだてていると、うるさいスリッパの足音は啓史の部屋の前でぴたりと止まつた。

「佐原せんせい！」

予想どおりの相手だつたが……少しどキリとした。

バケ子女史はしばらく黙っていたが、急にくすくす笑い出し「いるわけないわよね」とおどけて言う。

「まったくもおつ、ちくつとも捕まらないんだもの。啓史さんつてば、ほんと困るわ」  
勝手な言い草に憤るとともに、「啓史さん」という呼びかけに、ぞわりと鳥肌が立つ。  
トンという音とともにドアがかすかに揺れた。ドアにもたれたようだ。

啓史は舌打ちをし、そつと後方に下がつた。

なんでも俺が、こんな風にこそそししなければならないんだ。理不尽さにむかつ腹が立つてならない。  
啓史はゆっくりと窓に近づき、外に視線を向けた。

そもそも沙帆子が来るかもしれないのに……どうする?  
そう考えているところに、遠ざかっていくスリッパの音が聞こえ、ほつとする。

自分が来るまで待つつもりかと思つたが……  
足音が完全に聞こえなくなり、啓史はようやく肩の力を抜き、ソファに腰かけた。  
やれやれだ……：

よけいな邪魔が入つたせいで仕事を再開する気にもなれず、啓史は窓のほうを気にしつつ沙帆子を待つた。だが、五分ほどして、またスリッパの音が聞こえてきて、啓史は顔を歪めた。

なんだ？　また戻つてきたのか？  
腹が立つたが、戻つてきてしまったものは仕方がない。  
スリッパの音がドアの前にやつてくる前に、啓史はコートを掴んで窓に歩み寄つた。そして、音

を立てないように窓から外に出る。

コートを羽織りながら垣根の穴に歩み寄った啓史は、顔をしかめた。

またここをくぐるのか？

この穴は沙帆子専用だってのに……なんで俺が、こう何度もくぐる羽目に……いや、ぐちぐち考えても仕方がない。諦めた啓史は、頭を地面すれすれにまで下げて穴を抜けようとしたが、そこで目を見張った。

穴の向こうに驚いた表情の沙帆子がいたのだ。

「せ……」

啓史はすばやく指を唇に当て、「しつ」と言つた。そして、穴をどうにかくぐり抜ける。

「いつたい、どうしたんですか？」

しゃがんで待っていた沙帆子は、穴から這い出した啓史の耳元に唇を近づけ、潜めた声で問いかけてきた。

答えようとしたが、啓史の頭に視線をやつた沙帆子が急に髪に触ってきた。どうやら、頭に葉っぱがくっついていたらしい。一生懸命それを取ってくれる沙帆子に心が和む。じつとしていると、沙帆子の手が動きを変え、啓史の頭を撫で始めた。

頭を撫でられたことに驚き、思わず「何やつてる?」と口にしていた。啓史の言葉に驚いたらしく、沙帆子はさつと手を引く。

「な、な……」

別に驚かせるつもりじゃなかつたのに……こっちが驚かされたもんだからつい……  
「なんだ?」

啓史はつとめてやさしい声で聞いた。

「き、気持ちよかつたから……つい……。ご、ごめんなさい」

気持ちよかつた?

「触るなとは言つてないぞ」

取り成すように言うと、沙帆子は目を丸くして驚く。

「さ、触つていいんですか?」

「触れば……」

きまりが悪い思いを押しやり、啓史はぼそりと呟いた。

『触れば』ではなく、触つて欲しいのが本心……

沙帆子はおずおずと手を伸ばして、再び髪に触れてきた。彼女に頭をさわさわと触れられて、胸がくすぐつた。ずっとこの感覚を味わっていたかったが、どうしてだかいたたまれない気持ちが強くなつてきて、されるがままではいられなくなつた。

「朝飯……」

「は、はい」

啓史の言葉に、沙帆子はさつと手を引いてしまつた。手が離れた途端、ひどく物足りない気分を